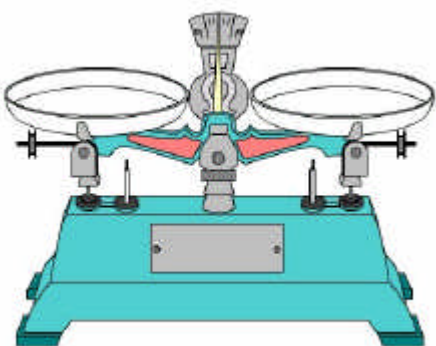


電波高夏休みの宿題



昭和二十三年四月、国立仙台無線電信講習所に入学した。国立無線電信講習所は、仙台と熊本の二ヶ所しかない。授業料は無料で、少しだが手当が出る。私は軍隊で九ヶ月間通信術を習得していたので、通信士になり身を立てたいと思ったからだ。

夏休みまでは、その当時郵便局で電報の送受信に使用していた、音響方式、(電磁石が鉄片を吸い付ける時発する音「かたッ、かたかた」の音でモールス信号を聞き分ける)で訓練した。

二学期から本来のトン・ツウで授業が始まる。二学期から国立の電波高等学校になった。一転して授業料を納める事になったが、大した額ではない。

夏休みに入る前日、宿題と云うか、頭の体操か、クイズまがい

の問題を出された。月刊の（リーダーズダジェスト）に載っていた問題だそうだ。

冒頭に問題の雛形を書いてみた。

見分けの付かない十二個の物体がある。真珠の玉とでも思えば良いと思う。そのうちの一個が不良品で、他の十一個より重いか軽いかは分からない。図の様な天秤測りを、三回だけ使用し、どれが重い不良品か、軽い不良品かを断定せよ、との問題だった。

私はこういう問題が出るとトコトンめり込む性格だ。下宿に帰って寝るまで考えても出来ない。次の日は故郷に帰る、列車に乗っても頭から離れない。一時間の汽車の中で考えを纏め、大河原駅でバスを待つていた時、回答が出た。神経衰弱になる一歩手前まで考え続けた。

欽ちゃん、夏休みに連れてきた大学生にこの問題を出したら、次の春休みに「この問題は絶対解けない」と断言された。

二学期が始まり、先生に回答を示したら、正解は四・五人だけだったそうだ。私のも正解で、もう一つの考えがあるとの事だった。兄の富ちゃんに出したら、もう一つの回答をよこした。

平成十四年十月十三日